

薬学部大型改修工事(1995年～1997年)

加茂 直樹 (旧職員)

2022年現在、北海道大学大学院薬学研究科・薬学部の教育研究棟はアルファベットのE字型をしています。Eの縦棒に当たるのが、今や北大の観光名所の1つとなっている銀杏並木に面した建物です。この記事では、北側にあるので、N棟と書きます。Eの字の横棒に当たるのが、東から順に、1979年設立の旧分析センター、中央は2008年に出来た臨床講義棟(薬剤師教育施設を含む)、および最西は2014年に完成した増築の研究棟です。ここで、旧分析センターと書いている理由は次のようです。後述しますように、1979年に薬学部には附属の全学共同施設として分析センターが作られましたが、2017年に、薬学部の附属を離れて、北キャンパス内の創成研究棟内に移動しました。本稿は1995年からのN棟の全面改修(大型改修)の報告です。

筆者がN棟に初めて入ったのは、1971年4月です。この時は、Eの横棒に対する建物は無かったと思います。西側には、動物舎とRI実験室がありました。N棟の壁には多くの縦のひび割れがありました。これは、1968年5月16日起こった十勝沖地震によるものだと言った記憶があります。起こったのは講義中であつたようですが、講義室の机の構造によって、机の下に隠れることが出来なかったと聞きました。N棟には、元素分析室があり、また別の場所に質量分析器やNMRの機器も設置されていました。元素分析室の斜め向かいに筆者の部屋があつたので、多くの学部外の人が元素分析のサンプルを出しに来るのをよく見ました。これらの施設は、1981年にEの横棒の東側の位置に、全学共同利用施設として北海道大学機器分析センターが設立され、この中に人員ともども移設しました。前述のように、西側には、動物舎、少し南に別の建屋としてRI実験室がありました。これから分かるように、N棟の南には「広場」がありました。ここで、研究室対抗ソフトボール大会や夏に教職員のジンギスカン懇親会などが開かれていました。ソフトボールの時は、「ホームランの規定」もありました。なお、N棟の北側(道路に面している)に空きスペースがありますが(現在は東側に自転車置き場がある)、このように道路から離れた位置に建物を建てるのは北大流だそうで、

スペースの大きさの大小はありますが、他学部でもそのようになっています。

いつの時は記憶にありませんが、米光先生が、無人の部屋で電灯がついているのは、けしからんと主張されました。電気代を節約して、研究費を多くしようということです。明かりがついていたほうが活発に研究しているとみられると「内心」思った人がいると思いましたが、研究費を増やすという言葉には逆らえません。米光先生は、早朝に来て、N棟を見回り、無駄と思われる電灯を消していました。米光先生に命じられて、筆者は各研究室の電気使用に関するアンケートをしたことがあります。これが、改修後の研究室毎に積算電力計を設置する原点です。

N棟は学部発足にあわせて、1965年から1968年に、2期工事で建てられました。薬学部になって1学年が80人になった第12期の人、3年生の第1学期からN棟での講義を受けたと聞いています。改修工事は1995年ですので、従って、改修は築約30年後のことになります。建物の老朽化が進んでいました。例えば、朝大学に来てみると、階段にコンクリートの塊がたくさん落ちているので、上をみると階段の天井のコンクリートがはがれていることもありました。最上階の5階のある研究室では、雨漏りのため天井に TENT を張るような状況でありました。また、別の研究室では、突然天井がはがれてコンクリートが落ちてくるということもありました。幸い人身事故には至りませんでした。丁度、マスコミで「大学の建物が老朽化しており、さらに設備が不十分で、研究教育環境が劣悪である等」の報道がされた時期でしたので、総務庁の役人が北大に調査に来て、薬学部の上記のような状況を見て写真を取って行きました。総務庁の報告書に大学名は伏せられてはいますが、本学部のことがのせられているとのこと。この時点では、当然のことながら新築を望んでいました。実験系の学部では全面改修など出来るはずがない、出来るとしたら我々は長期間の研究ストップという犠牲を払わなければならないと思っていました。

阪神・淡路大震災(1995年1月17日)が起こり、今後の震災等の対策のための補正予算が組まれるこ

となり、耐震工事をすることで全面改修をしないかという本部施設部の提案がありました。このことをもう少し記憶を呼び起こすと次のようです。東京出張中の栗原学部長から電話があり(誰が受けたかは記憶がない)、次のような内容でした。文部省で北大本部の施設部長に会った。施設部長が、国に予算があり、その予算で薬学部の改修工事をしないかという事なので、(その方向で)学部内で検討してほしいとの内容でした。はじめは部分的な補強工事であったと記憶していますが、いつの間にか全面改修になりました。自分は、全面改修は出来ないと思いました。しかし、学部内で検討し施設部と折衝したのち、大型改修工事の要求を文部省にすることになりました。新築は難しいとの判断、このまま庁舎が老朽化していくのを小さなスケールでの改修で済ましていいのか、等を考えた上です。また、施設部が強く改修工事を望んでいる点も強い影響がありました。強気に屈するとの意味ではなく、強く望むからには何かが期待出来るであろうとの考えが脳裏に浮かんだのも事実です。栗原学部長が改修の決断をしました。今となって考えると、結果論かもしれませんが、正しい決断であったと思います。建物は見違えるようにきれいになりましたし、実験台、ドラフトチャンバーは新しくなりましたし、冷蔵庫・フリーザーを新しくし、多くの什器類も新品になりました。その上、長年の夢であった動物舎も新築されました。確かに2年半におよぶ工事で研究が妨害されたこともあり、騒音や塵に悩まされたこともあり、移転作業で1ヶ月近くごたごたしたことも事実です。しかし、昨今の日本の財政状況をみるにつけ、あの時を逃していたら、現在どうなっていたかを思うと、少々ぞっとします。実験系の学部が、研究・教育をしながら、同じ場所で大型改修工事を行うのは、全国的にもあまり例がないと思われます。熊本大学の薬学部、東北大学の薬学部で全面改修がされており、また予定されていたので、その例などを研究しました。実験系の学部での全面改修が如何に大変であるかは、つぎのことが示しています。実は上記で施設部の強い要望と述べましたが、これは上層部の人の意見です。実務を担当する人があるとき、「薬学部は(こんな面倒な)全面改修は拒否すると思った」ともらしていました。建物計画委員会の中に、ワーキンググループ(WG)をつくり、WGのメンバーとして、栗原学部長、池田、松田(彰)の各先生と小生がその任にあたることになりました。後になって、新たに学部長になられた長澤先生も加わりました。

最大の問題は、当然のことながら、改修中の研究

場所の確保でありました。N棟の南側にプレハブの実験棟をつくることになりました。場所は現在の臨床講義棟の位置で、N棟と渡り廊下でつながっていました。この大きさについても、施設部との話し合いが数度にわたって持たれ、WGが大学本部で折衝しました。最終的には約1000m²におよぶ建物になりましたし、諸設備も十分に考慮してくれました。これも施設部の大英断であったようです。このようなことを施設部がしてくれ、また、文部省が許可した背景は、いわゆる「北大薬学部の実力」であると言われていています。過去に同窓生各位があげられた輝かしい成果のたまものと感謝しております。

薬学部職員全員の会議を数度行い、実行案を考えました。改修案の作成は1995年の連休を返上して行いました。コンピュータのいわゆるお絵かきソフトが大活躍しました。案は次の通りです。薬学部を縦に4つに分け、東の工事区画から改修工事を行う。何故4つに分けたかは、3、4、5階は1フロアに4講座がいるからです。最初の工事区域にかかる2講座と学生実習施設をプレハブに移転する。改修工事の終了した区画には、隣接する西側の講座が横に移動し、移転する。最後にプレハブに移転した部分がN棟に戻ってくることにしました。このようにすると、プレハブに移転した講座・学生実習室を除き、1回の移転で済むからです。ただし、薬品製造学講座は2回の移転となりました。従って、改修後は、講座は東に移動し、改修前、東端にいた講座・学生実習室は、西の端に位置することになりました。構造上取っても差し支えない壁は取り払って、新しい壁を作ってもよいとのことで、間取りも自分たちの希望の通りと(原則的に)になりました。大きな実験室を作った講座もあり、その他独創的な間取りをした講座もあります。電気・ガス・水道・下水の配管もすべてやり直しました。ヒヤリングと称して、施設部の人に我々の要求・要望をするわけですが、夜中に及んだこともあり。また、我々は将来のことも考えて出来るだけ電気容量を多く取ろうとするのですが(また、廊下に機器を置けるように)、施設部の人に、ある時はやんわりとある時は強く拒否されたり、矛盾を追求されたりしたことを思い出します。本当に電気を使う機器があることを示すために、機器の銘板のコピーを要求されたこともあり。廊下に物品を置くことは、消防法上許されていません。

補正予算での大型改修工事が認められ、プレハブの工事がはじまったのは1995年の秋でした。プレハブの工事が終わり、実験台等の据え付けが終わった

のが1995年の11月上旬でした。これから最東にいた講座や学生実習室の移転が行われました。さて次はいよいよ本館の改修です。移転して部屋に何もなくなって、まず、天井のアスベストの除去が行われました。工事部分は閉鎖されていましたが、ポリシートでアスベストが飛散しないようにして除去したようです。講義室が無くなるので、会議室を講義室に改装しました。旧分析センターへの通路の確保の問題がございましたが、何とか解決。最東の1/4の改修工事が終わり関係講座の移転が終わったのは1996年5月下旬でした。以後、各々の1/4の改修を約半年かけて工事が行われました。事務部や図書室の移転をその機能を維持して最低回数で済まさなければなりません。第2および3期工事中では、工事区域を通らないと他講座や中央機器室に行けないという問題もありました。低温室がすべて同時期の工事区画にあるため、この工期中はプレハブ式の低温室を玄関ホールに設置したりしました。第3工期は中央の階段やエレベーターが工事区域になると同時に、一番西に位置していた講座は工事区域で分断され、孤立してしまうことになりました。通路の確保のために、非常階段を使用しなければならない、それも冬季にということになり、西側非常階段に幌を張って雪が入らないようにして使いました。長い距離のトイレを経験したと思います。工事に伴う埃と騒音に対する戦いもありました。最後の仕上げのためコンクリート壁を滑らかにする工事の時、どこからともなくやってくる埃に悩まされました。移転にともなう研究の中断もあったと思います。移転時期と学生の卒業修了時期とが重なるとの問題も生じました。また、講座が2つの工期にまたがり、1度の移転では終了しないので、半年間面積の狭いところで我慢したり、2カ所にわかれて研究したりした講座もあります。また、図面を見て考えていた流し、配電盤および配管の配置が実際と異なり、予定していた備品が設置できないとか、このように要求したはずなのに、その通りになっていないこともありました。

大型改修工事はこうした2年あまりの歳月をかけて行われ、1997年10月に工事が竣工し、諸施設の導入、最終の講座および学生実習施設の移転とともに終了しました。また、劣悪な施設であった動物舎もこの工事とともに、本館西側に新築(1996年2月工事開始、1996年6月竣工)されました。クリーン動物飼育室を含む2階建て約400m²の建物です。動物舎の設計は動物小委員会の皆さんが考えてくれました。

N棟は建築面積2,606m²、建物面積8,132m²です。



銀杏並木に面した薬学部正面の外装は2階まで理学部本館に似せてつくられ、茶色と従来の白の2色の建物に生まれ変わりました。今後の北大の建物の外観はこのように統一されるとの由です。ただし、2022年現在、必ずしも、全学的にこのようにはなっていません。施設部によると、全面を茶色の煉瓦風にしなない「公式的」理由は、昔の面影を残しておかなければ同窓生の郷愁がなくなるからだそうです(同じ位置に建っているため)。現在ではポプラ並木に代わって、薬学部前の銀杏並木が観光名所になりつつあり、施設部は薬学部の正面の外観を重視し、ドラフトや排気口や空調の配管等は一切北面には出させてくれませんでした。

暖房は温水暖房に変更されました。お陰でスチームのように室内温度の急激な変化が生じることなく、また、改修により隙間が無くなったこともあり、快適な冬となりました。夜間や休日の暖房のためにFF式のガスストーブをつけました。これも冬の快適さに役立ちました。また、普通のガスストーブと違い、炎が露出していないので、より安全であると思いました。この設置には大学本部や国の機関である北海道建築事務所等の反対に会いましたが、WGの面々の反論および薬学部の過去の実績がこの反対を押し切りました。実は、この設置には「ある問題」が起きました。1週間ほど工事の音がしないので、どうしているのかなと不審に思っていました。報告があり、建物の横に走っている鉄筋を誤って切ってしまったが、溶接して元に戻したとの報告がありました。

天井が低くなり、最初は何やら圧迫感を感じたものですが、少し経つと慣れました。耐震のため、壁も5cmだけ厚くなっています。従って各部屋は10cmだけ狭くなったのですが、移転に際して多くの物品を処分したので、何とか収まっています。図書室の閲覧室

も広く快適になり、24 時間オープンして、学生は夜遅くまで図書室で勉強出来るようになりました。また、すでに述べましたように、研究室毎に積算電力計を設置しました。WG は、各部屋につけることを要求しましたが、受け入れられませんでした。旧動物舎はその殆どを図書の保存庫とし、1 部屋に NMR (学部ハイテク設備費で新たに購入) を設置しました。プレハブ(新館) は、将来の重点化に備えて 1 講座分の実験室を残し、他は各講座や事務の倉庫・物品保管庫、機器室、中央機器室、および生協売店等へと模様替えのプランを立てましたが、施設部から仮設だからという事で取り壊されました。

1998 年 4 月から北大薬学部は重点化されました。このため、南西に約 6,000m² の 5 階建て建物を要求していました(1998 年において)。この建物が出来た時には、現在の RI 実験室はこの新築の建物に取り込まれています。この素案は 2015 年に実現しました(なお、この新棟建設の経緯については、当時、建物委員長であった鈴木利治教授に執筆を依頼しております。編集部注)



大型改修について、一番大変な努力をされ、苦勞をされたのは、各講座の若い職員・大学院学生であると思います。老人は言うだけですが、彼らは実験をしながら新しい実験室の立案をし、移転に際し物品を殆ど自力で(自分たちで運べない大型の物以外は)運搬するという勞力を強いられました。問題点があり、またあったかもしれませんが、今回の大型改修工事が成功であったといえるなら、彼らが一番の功勞者と思います。また、既にいくたびか触れましたが、このたびの改修工事に関する本部との折衝で感じましたことは、過去の薬学部の実績の重さであります。この点を同窓生各位に感謝すると同時に、それをさらに重くすることが職員およびこれからの若い学生諸君の責務であると思います。

本稿は「芳香」第 47 号(1998)の記事に加筆・修正したものである。

同窓会 HP:2022 年 12 月 2 日公開

